



1636年～1869年(約230年)

伊予西條藩を知る ②

(第一次西條藩)一柳家、(第二次西條藩)松平家



第一次西條藩は、初代藩主 **一柳直盛**が西條へ赴任の途中大坂で病没し西條の土地を踏まなかったため、直盛の長子・2代藩主 **一柳直重**が西條 **3万石**で入部すると、当時の中心地大町村(大念寺より東)に仮住まいするかわら、直ちに海浜の地形をよく調べ、道路や城池の整備を図り、西條陣屋(現西条高校)の築造や町並みの区画造りに着手した。葦(あし)の生えた湿地帯と川の流れを利用して堀を巡らし、泥をかき揚げて土塁を造り「かき揚げ城」、石垣を築き、中が見えないように黒松を植えた。黒松の間には矢来(やらい、竹や丸太を縦横に粗く組んで作った仮りの囲い)を造った。

※陣屋は、広義には城の仲間といえるが、城は攻撃的な設備を備えているのに対し攻撃力を持たないものを言う。西條陣屋は、大きな濠をめぐらし、城に近い規模であった。陣屋が決まったので、これを囲んで城下町が造られることとなった。城下町は、陣屋を囲んでこれを取り巻くように東西に武家屋敷があり、隣接してその外側(東の武家屋敷の東隣)に町人町(町家)が造られ、物資の供給をした。城下町の外囲いには寺院や神社が建てられて、万一の戦の際には、その広い境内や建物は、藩兵の宿舎や防衛の場になるよう計画された。また、これらの寺社の境内付近は諸物資交流の市が立ち、大勢の人が寄り集まる賑やかな遊楽の場ともなった。農村農地は、城下町から遠く離れた地区にあった。

西条の地名・**明屋敷** は、陣屋と武家屋敷からなる地域で、寛文五年に3代一柳直興が改易されたとき、神拝村内にあった陣屋や武家屋敷は一時幕府領(天領)として**5年間**公収された。

※そのため居住していた藩士らが退去して、武家屋敷が空家になったことから「**あきやしき**」という呼称が生じたという。現在では、「**あけやしき**」と公称されている。

陣屋町の配置は、武家屋敷に隣接して北から魚屋町・中之町・本町の通りがあり、本町の東に大師町をおいた。南北にのびる本町と大師町の端を東西に結んだ町が横町で、南が上横町、北が下横町とよばれた。上横町から東が東町、上横町と東町の間から南にのびる町が紺屋町である。紺屋町は町内に紺屋が七軒あったところからその名がつけられた。藩は陣屋町の発展をはかるため、そのころ既に町場が形成されていた隣村の大町村から有力商人を招いて住ませた。それは近江屋・広島屋・大和屋・備前屋などで、これらの有力商人は西条町開基八人とよばれる。また、その他にも多くの商人・職人が来住して陣屋町が形成された。

大師町の北側はかつては歩町とよばれた北町で明屋敷分に属し、北町の北東にある **風伯神社** は朔日市村に属する。この神社は陣屋町の **鬼門除け** として当地に移されたもので、これに隣接する **万福寺** は、一柳氏に従って伊勢国神戸から移された寺である。また東町の **妙昌寺** は一柳直重が伊勢国神戸で没した母の菩提を弔って建立したもので、寺号はその法名にちなんで名づけられた。

